



2012年度 薬膳の旅

連載3回目(全3回)

「各国の薬膳」を勉強しながら
「中国の世界文化遺産」を巡る旅

2012年薬膳の旅 (2/2)

15期中医薬膳師コース卒業生 手塚 温子



昼食後に、世界複合遺産の黄山に登りました。黄山は「黄山归来不看山」と言われ、中国人なら一生に一度は登りたいと言われる山です。

黄山は奇岩・奇松・雲海・温泉で知られる山岳風景区で1800メートルを越す山が3座あります。私達は、行きはお天気に恵まれ、空中散歩が楽しめるドイツ製のソーラーパネル付きロープウェイで黄山の景色を堪能しました。ロープウェイの駅からホテルまでの道は、石田畳できれいに整備されていて、歩きやすく、皆でわいわい話をしながら行きました。途中で、ホテルのベストを着た、大量に食材を運ぶ強力さんとすれ違い、山男の力強さに感動しました。

その日のお夕飯は、山の上にいることを忘れてしまいそうな、豪華な夕食に驚き、皆で強力さんに感謝しながら頂きました。



その後、屯溪区に向かい、明清時代の町並みが残る老街を散策しました。ここは観光地と言うより、黄山に住んでいる人の商店街です。

翌朝の御来光は6時17分で、ホテルのロビーに6時に集合して展望台に向かいました。雨ではなく、霧が深く、残念なことに御来光を見ることはできませんでした。薄暗い霧の中で、中国語・韓国語・日本語・英語・フランス語・ラテン語で「残念だった」との声が響き、皆でホテルに戻りました。帰りの日は雨ではなく霧が深く、昨日とは別の山かと思うほどに、天候が変わりました。しかし、私は霧深い黄山の景色は幻想的で気に入りました。ロープウェイの駅だけが人と遭遇しました。痛そうな姿が気の毒でした。私達の中から人がなくて安堵しました。

街の中心に中国で初めて個人の博物館を運営している萬粹樓がありました。入館料50元を払うと、ここでも案内の若いお嬢さんが登場しました。彼女は英語が堪能で、英語で説明してくれました。私はやっと言葉が通じる安心感に館内をよく見ると、どれもこれも素晴らしいコレクションでした。一番の宝は、その建物自体です。補強をしたようですが、内装は当時のままで4階建になります。各階を案内してくれました。西通村で2階はどうなっているのかと、気になっていたことが、実際に自分で体験することができました。外からは3階建てに見えますが、実際は4階で、その4階には広いバルコニーがありました。なかなか自由に外に出ることができなかった時代に、このバルコニーからの眺めは、町外れまで見渡せます。私は「当時の女性がどんな気持ちで眺めたのか」と思いながら、今が21世紀と忘れてしまうほどの、古い町並みの美しさに心が奪われました。しかも今この家で暮らしている人が居ます。それにも驚きました。私は徽州文化が遺産とよばれる名所に変わっても、「元々そこに暮らしていた人々の生活こそ継承するものである」との考えが、時空を超えて素晴らしいと思いました。

上海では、豫園内の上海緑波廊酒樓にて最後の晚餐となりました。

私達は、ここでの食事が満場一致で、この旅で一番美味しかった料理に選びました。今回の旅では、たくさんの食材に出会い、各地の郷土料理を味わうことができました。特に上海蟹の季節に産地で味わった感動は忘れられることができません。また中国には地ビールが多いことも知りました。私は当初、中国の箸が使いにくくて「MY箸を持参すればよかった」と思いました。しかし、私はバスで長い移動をする間に、どこまでも果てしなく続く1本道、また長く続く歴史に触れて、次第に中国の箸の形の意味がわかるような気持ちになりました。食は命の源で、文化でもあります。偶然に上海緑波廊酒樓で、西洋人のご夫婦が中国人のガイドさんの解説を聞きながら、食事をしていました。彼らの手にはナイフとフォークがありました。が、私達と同じ料理を食べていました。西洋人には、食べやすいようにナイフとフォークを用意している店は気がきくと思えました。しかし、私は、形はさまざまでも、食事にお箸を使う文化の国は「お箸の国」として、「もつと互いを尊重して理解できる関係になれるのでは」と、思いました。「食には、その力がある」と、思います。それは、今回の料理コンテストで、鷺見先生の挨拶に会場から一番大きな拍手が起こったことが証明しています。私は、その時の拍手に胸が熱くなりました。

最後に、今年本草薬膳学院10周年と日中友好40周年の記念すべき節目の年に、この旅を決断した辰巳先生に感謝いたします。また、素敵なお仲間にも感謝しています。また、素敵なお仲間にも感謝しています。また、素敵なお仲間にも感謝しています。また、素敵なお仲間にも感謝しています。

私は、この旅の初日に辰巳先生から生の棗を頂き、初めて口にしました。りんごのような食感に、ほの甘いけどサッパリした味は、一口で大好きになりました。私は初めての中国で、さまざまなことを体験しました。その時々感じたことは、私の生涯の宝になると思えます。そして、生の棗を味わう度に、この旅を思い出すと思えます。どんな時代になろうと、薬膳の旅を通じて、私同様一人でも多くの人が「食の力」を信じて、このような民間交流が絶えることなく、日中友好の架け橋になることを願い、感想文とさせて頂きます。

